

ISSN
0387-6268

徳島県博物館紀要

第18集

昭和61年度

徳島県博物館

徳島県博物館紀要

第18集

昭和61年度

徳島県博物館

目 次

土成丸山古墳調査報告	
天羽利夫・岡山真知子・武蔵美和 ……	1
「蜂須賀侯日光参詣絵巻」についての二、三の考察	
山 川 浩 實 ……	21
日本産ラクダムシ類の研究 (1)	
大 原 賢 二 ……	31



土成丸山古墳航空写真 (菅原康夫氏提供)

土成丸山古墳調査報告

天羽利夫・岡山真知子・武蔵美和

はじめに

ここに報告する土成丸山古墳は、徳島県博物館が「徳島の前期古墳研究」のテーマにもとづき調査した遺跡である。

当館では、調査研究と展示資料の充実を目的として遺跡調査に取り組んできた。当館が遺跡調査を開始したのは、1971年3月の県指定史跡宝幢寺古墳（前方後円墳）からである。この調査を契機に、国及び県史跡に指定されている古墳や学術上または保存上重要と考えられる古墳に主眼をおき、墳丘や石室の実測調査を毎年実施してきた。

宝幢寺古墳以降は「徳島の後期古墳研究」をテーマに、主として横穴式石室の調査に取り組んできた。この一連の調査により、徳島県内の横穴式石室に関する重要な問題はかなり把握できたと考えられる。

このテーマをさらに進展させるために、1979年度から「徳島の前期古墳研究」をテーマに遺跡調査を実施することになった。気延山古墳群の4基の古墳の調査を終え、懸案であった土成丸山古墳の調査を実施することにした。土成丸山古墳は、県下で数少ない周濠をもつ古墳であるが、調査が実施されたことがなく、規模・年代等不明な点が多かった。そこで、墳丘の地形測量を実施して、規模だけでも明らかにしておこうとのねらいで、今回の調査となった。

土成丸山古墳調査に際して、土成町・土成町教育委員会・同町文化財保護審議会をはじめ土地所有者の方々に多大なご尽力、ご指導を賜わった。特に文化財保護審議委員の村尾耕炳氏には一方ならぬお世話をいただいた。また、土成町有線テレビには町民の方々への周知等でご尽力いただいた。なお、本稿執筆にあたり、徳島県教育委員会文化課の菅原康夫氏に貴重な航空写真を提供していただいた。特記して深く感謝したい。

遺跡名	町史跡 土成丸山古墳
所在地	板野郡土成町高尾字熊ノ庄120番地（町有地）
調査期間	1984年3月6日～20日
調査主体	徳島県博物館
調査主任	主任学芸員 天羽利夫（当時）
調査協力	土成町教育委員会・土成町文化財保護審議会・徳島考古学研究グループ・土成町老人福祉センター・熊谷寺・土地所有者（鈴木重忠・和田信夫・安田茂・吉田久吉）
調査参加者	岡山真知子・小林勝美・河崎敏之・株木彰・辻佳伸・蔵本晋司・武蔵美和・大塚一志・影山輝美・下田順一・新孝一・多田寿一（順不同）

調 査 一 覧

- 1 1971年3月 県指定 宝幢寺古墳 鳴門市大麻町池谷字勝明谷11の1
- 2 1971年8月 穴不動古墳 徳島市名東町1丁目
- 3 1972年2月 県指定 矢野の横穴式古墳 徳島市国府町西矢野山林39
- 4 1972年8月 観音山古墳 那賀郡羽ノ浦町中庄字千田池33
- 5 1973年2月 県指定 弁慶の岩窟 小松島市芝生町大嶽8の2
- 6 1973年3月 国指定 段ノ塚穴・棚塚 美馬郡美馬町坊僧368
- 7 1973年8月 国指定 段ノ塚穴・太鼓塚 美馬郡美馬町坊僧373
- 8 1975年3月 県指定 北岡西古墳 阿波郡阿波町北岡74の2
- 9 1976年3月 県指定 北岡東古墳 阿波郡阿波町北岡252の2
- 10 1976年8月 忌部山2号墳 麻植郡山川町山崎字忌部山123
- 11 1977年8月 忌部山1号墳 ”
- 12 1978年8月 忌部山5号墳 ”
- 13 1980年3月 曾我氏神社1号墳 名西郡石井町城ノ内字前山
- 14 1980年8月 曾我氏神社2号墳 ”
- 15 1982年3月 長谷古墳 名西郡神山町阿野字長谷672
- 16 1983年3月 山ノ神古墳 名西郡石井町石井2429番地, 同西南の2428—2番地
- 17 1984年3月 土成丸山古墳 板野郡土成町熊ノ庄120番地
- 18 1984年8月 若杉山遺跡 阿南市水井町奥田42番地の9, 11
- 19 1985年8月 若杉山遺跡 ”
- 20 1986年8月 若杉山遺跡 ”

(なお発掘調査は10～15, 18～20で, それ以外はすべて測量・実測調査)

報 告 文 献

- 1 立花博「遺跡調査概要—宝幢寺古墳の実測」『徳島県博物館報』12号 1971.7
- 2 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の—様相—その1—」『徳島県博物館紀要』第4集 1973.3 (No.2～6までの調査報告)
- 3 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の—様相—その2—」『徳島県博物館紀要』第8集 1977.3 (No.6～9までの調査報告)
- 4 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978.3 (No.10～12の調査概要)
- 5 天羽利夫・岡山真知子「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集 1982.3 (No.13, 14の調査報告)
- 6 天羽利夫・岡山真知子・阿部里司・林慎二・多田寿一『忌部山古墳群』徳島県博物館 1983.3 (No.10～12の調査報告)

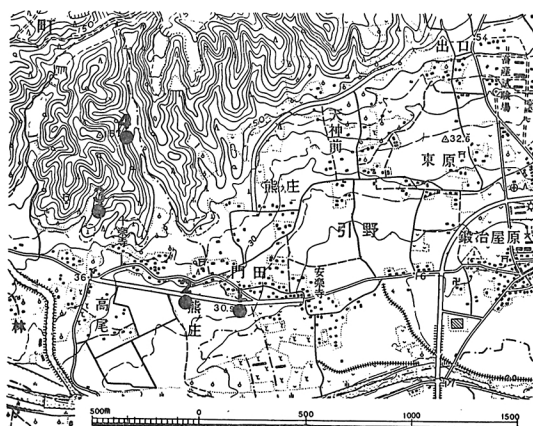
- 7 天羽利夫・岡山真知子・宮本敬子・高橋正則「長谷古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第15集 1984. 3 (No.15の調査報告)
- 8 天羽利夫・岡山真知子「山ノ神古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第17集 1986. 3 (No.16の調査報告)
- 9 岡山真知子・阿部里司・武蔵美和・絹川一徳・三宅良明・大塚一志『若杉山遺跡発掘調査概報一昭和60年度一』1986. 3 (No.19の調査報告)

1 土成丸山古墳と周辺の遺跡

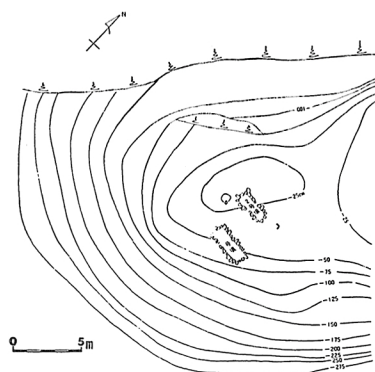
土成丸山古墳は、土成町の東端、上板町との町境に位置する。吉野川の支流、宮川内谷川の扇状地の扇端部にあたる。平地に築かれた周濠をもつ古墳で、現在のところ県下では波野丸山古墳と2つしか該当しない。現在、周濠部は水田や牧草地として利用されており、用水路の改修などでかなり原状が変更されている。墳丘部は、一部墓地などに利用されているが、灌木等でおおわれ、比較的良好な保存状況である。

土成町は吉野川中流域の北岸にあり、河岸段丘がよく発達している。このよく発達した河岸段丘上やその間にみられる扇状地は、旧石器時代遺跡の宝庫である。特に宮川内谷川流域に形成された扇状地には有数の遺跡が展開している。徳島県の拠点的遺跡である椎ヶ丸遺跡^{註(1)}をはじめ、宮川内遺跡^{註(2)}・宮ノ尾遺跡^{註(3)}などである。巨視的には、サヌカイトのナイフ形石器を主体とするが、瀬戸内技法・国府型ナイフの系統と背面が複数の面からなる剥片・ナイフの系統という2つの剥片技術の混在する石器群からなっており、注目される。^{註(4)}

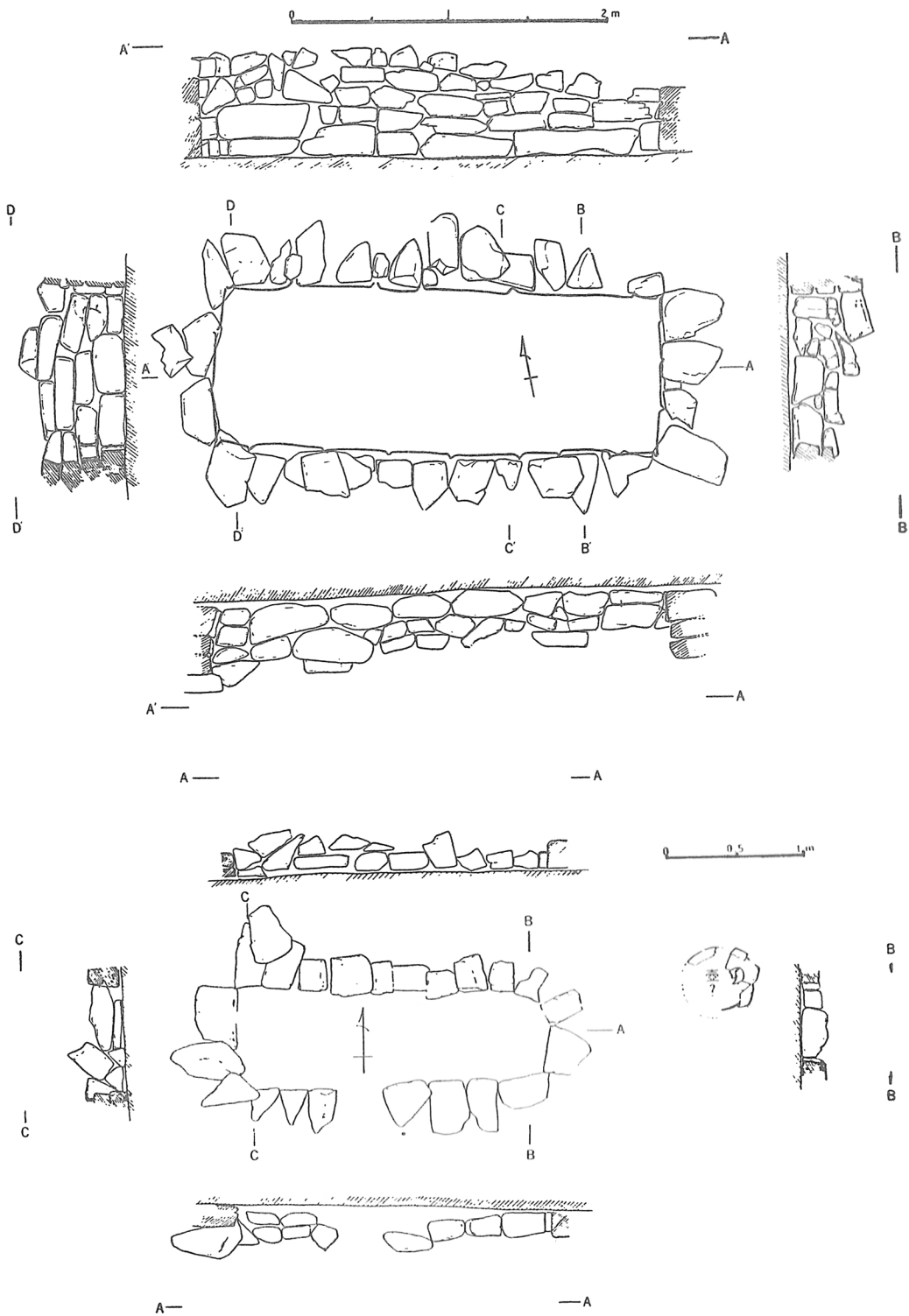
最近の開発に伴う発掘調査によって弥生時代の遺跡が新たに発見された。土成工業団地建設に伴う北原遺跡がそれで、弥生時代の土塚などが検出された。^{註(5)} また、吉野川北岸農業用水工事に伴った大木峰延遺跡の調査でも炉跡が検出された。なお、この遺跡は奈良・平安時代から室町時代を中心とした遺跡である。^{註(6)}



第1図 丸山古墳の位置 (1 : 25,000 『大寺』)
1 丸山古墳 2 熊ノ庄古墳 3 十楽寺山古墳
4 安楽寺址



第2図 十楽寺山古墳実測図
(『土成町史』)



第3图 十楽寺山古墳 石室実測図 (『土成町史』)

古墳は数多くあったらしいが、現状で確認できるのは数基しかない。土成丸山古墳の陪冢とも考えられるのが熊ノ庄古墳（第1図 No. 2）である。小さな円墳であったらしいが現存しない。また約700m西に四国霊場七番札所十楽寺があり、その裏山に十楽寺山古墳（第1図 No. 3）がある。十楽寺山古墳は径約15mの円墳で、2つの竪穴式石室を内部主体とする。いずれも砂岩の自然石で構築されている。南の1号石室は、全長2.83m・幅（東端）97cm・（西端）92cm・現在高67cmを測る。1号石室の北3mに2号石室がある。主軸は平行で、墳丘の最頂部に位置する。長さ2.27m・幅（東端）65cm・（西端）70cmを測る。2号石室の1m東の地点に径50cm、深さ20cmの掘り込みがあり、そこに埴輪質の土器片が付着していた。壺棺の可能性が強い。石室内からは青銅片や鉄器の小破片が出土しただけで、他に副葬品は認められない。2号墳→1号墳という築造順序が考えられている。^{註(7)}

また、現存しないが西谷に西谷古墳があった。銅鏡2面・勾玉3個・管玉22個・鉄斧3・刀剣3が出土した。鏡は、変形獣帯鏡と神獣鏡で、勾玉に丁字頭勾玉が1点含まれている。^{註(8)}

向山の丘陵には、向山古墳群が展開する。1号墳（岩屋古墳）は、横穴式石室を内部主体とする。砂岩を石材とし、玄室の長さ3.55m・幅1.75m・高さ2.1mを測る。羨道は残存部で幅1.5mである。2号墳は、径8m・高さ2mの円墳である。^{註(9)}

御所神社裏山には、御所神社古墳がある。昭和53年度の徳島県教育委員会の調査で前方後方墳と推定された。全長75m・前方部幅30m・後方部長さ40mを測るが、内部主体・出土品ともに不明である。^{註(10)}

吉田の姫塚古墳は、小円墳で須恵器杯が出土している。遊塚古墳からは、鉄刀が出土した。また、南原の穴薬師古墳は、径7m・高さ約2mで横穴式石室を内部主体とする。玄室は長さ1.8m・幅1.75m・高さ1.8mと立方体を呈する。羨道は、現存で長さ3.75m・幅1.5mを測る。側壁には砂岩・天井石には緑泥片岩を使用している。土成小学校西の赤田山にも古墳がかつて存在し、玉類が伝えられている。^{註(11)}

この他にも村誌などをみると、かなりの数あったらしいが、現在では地点すらわからない状況である。

平城宮から、「阿波国阿波郡秋月郷庸米物部 小龍一俵」と記された木簡が出土している。これから、奈良時代に阿波国阿波郡に秋月郷が存在していたことがわかる。また、『和名抄』にも「秋月郷」が記されている。^{註(12)}^{註(13)}

平安時代には、安楽寺址（第1図 No. 4）があり、単弁蓮華文の軒丸瓦、連珠文の軒平瓦が出土している。また、十楽寺西北の西谷には、堂が原があり、布目瓦が散布している。また、火葬墓も土成町で2カ所確認され、蔵骨器が残されている。^{註(14)}

室町時代には、細川氏の活躍した拠点のおかれた地域で、特に秋月城は現在も残されている。秋月城周辺には、安国寺址、蛭子瓦窯などの遺跡も集中している。また、水瓶や古丹波焼の蔵骨器も出土しており、一大中心地であったことがわかる。^{註(15)}

註(1) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣 1976年、高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27 旧石器文化談話会 1983年、高橋正則「板野郡土成町椎ヶ丸遺跡の破壊」『徳島考古』第2号 1985年

註(2) 天羽利夫「徳島県の遺跡」(前掲書)、高橋正則「徳島県宮川内谷川流域の遺跡」『旧石器考古学』 31
旧石器文化談話会 1985年

註(3) 註(2)に同じ

註(4) 高橋正則「徳島県宮川内谷川流域の遺跡」(前掲書)

註(5) 徳島県教育委員会文化課『北原遺跡現地説明会資料』 1986年

註(6) 『徳島県文化財だより』第18号 徳島県教育委員会他 1986年

註(7) 立花博「原始社会」『土成町史』上巻 1975年

註(8) 立花博「原始社会」(前掲書)

註(9) 徳島県教育委員会文化課『徳島県文化財調査概報』昭和53年度 1980年、小林勝美「徳島県内の前方後方墳
の研究」『徳島県立城東高等学校研究紀要』第6号 1981年

註(10) 立花博「原始社会」(前掲書)

註(11) 立花博「原始社会」(前掲書)

註(12) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡』I 1969年

註(13) 池邊彌『和名類聚抄郷名考証』吉川弘文館 1970年

註(14) 立花博「古代社会」『土成町史』上巻(前掲書)

註(15) 小林勝美「瓦窯の研究」『研究紀要(第5号)徳島県立城東高等学校 1980年』

2 調査の概要

1) 調査の経過

土成丸山古墳は、平地に築造された周濠をもつ円墳で、昭和46年3月10日町史跡に指定されている。『板野郡誌』^{註(1)}には「高さ八間周囲二百間」、『御所村誌』^{註(2)}に「赤白二種の埴輪円筒をもち、円筒以外にも種々なものがあり、直径廿二間高さ約四間周囲に幅五間位溝を有せし」との記載がある。『土成町史』^{註(3)}では、墳丘基底約30m・高さ約6m・幅約15mの周濠があり、二段構築と述べられている。しかし、一度も本格的に調査されたことがなく、規模は推測の域をでていない。“ここを掘って腹痛になった”という伝説が残されており、墳丘頂部に盗掘坑が2.5m×2mほど認められるが、内部主体については不明である。また、周濠についても、用水路の改修工事等によりかなり原状が変更されてしまっている。そこで、墳丘および周濠の規模を明らかにするために、測量調査を実施することにした。

まず、現在確認できる周濠の周囲にA～Kの11点の基点を設定した第1次トラバースを組んだ。次に墳丘内に頂部のP.0を中心に1から11まで12点を設定し、第2次トラバースとした。いずれも閉合トラバースである。また、第1次、第2次も東・西半分でそれぞれ閉合させ、基点の誤差修正を行った。その上で、基点から平板測量を実施していった。原図は、縮尺100分の1、25cmコンタで描いた可能な限り広い面積を測量することとしたので、18枚もの図となり、図面編纂に手間どった。

墳丘裾で埴輪片がかなり採集できた。年代決定上重要な資料であるので、整理して章末に紹介した。

註(1) 徳島県板野郡教育会『板野郡誌』 1926年

註(2) 徳島県板野郡御所村役場『御所村誌』 1929年

註(3) 立花博「原始社会」『土成町史』上巻(前掲書)

調査日誌抄

3月6日(火) 曇のち雨

墳丘の草薙, 伐採, ポイントの設定

3月7日(水) 曇のち晴

墳丘の草薙, 伐採, ポイントの設定

3月8日(木) 晴

墳丘の草薙, 墳丘頂部の測量(30.75m~30.0m), 埴輪片採集

3月9日(金) 晴

墳丘頂部の測量(29.75m~28.75m), トラバース杭設定, 配点図作成, 埴輪片採集

3月10日(土) 雨のち曇

トラバース測距, 測高

3月11日(日) 晴

トラバース測距, 墳丘部測量(28.75m~5m)

3月12日(月) 晴のち雨

墳丘部測量(28.5m~完成), P.Cから周濠西側地形測量

3月13日(火) 曇

P.Cからの測量, P.Gからの測量

3月14日(水) 雪のち曇

埴輪の実測, 段ノ塚穴・願勝寺の見学

3月15日(木) 曇のち雨

南側周濠, 東側周濠地形測量,

3月16日(金) 曇

墳丘北斜面, 西斜面, 裾部を地形測量

3月17日(土) 晴

P.Eより南西部の溝および池の北辺・西辺および西にのびるあぜの地形測量

P.Kより墳丘北側の県道および県道北側の地形測量

3月18日(日) 晴

P.D~P.EおよびP.12からの測量終了, P.F~P.J間のレベル記入

現地説明会(60名参加), P.Kより県道北側の地形測量

3月19日(月) 雪

周濠北西部分の単点測定, 補足調査, 測量図の確認

3月20日(火) 晴

補足調査, 測量完成

2) 調査結果

調査の結果、周濠をもつ二段築成の円墳であることが確認できた。

最高点は、30.86mである。墳丘裾部は、東で24.92m、西で24.399m、南で24.394m、北で25.77mであり、北が1～1.4mほど高くなっている。これは自然の地形の起伏と考えられる。墳丘の裾は現状で東西43m、南北39m、高さ6.5mを測る。西側はかなりの土砂の流れが認められ、中心から同心円を描くと、径40mの円墳が復元できる。

等高線をよく見ると、27.0m前後で間隔が疎になり、28.0m前後から間隔が密になる。疎になるのが、東では27.25mから27.75mまで、西では26.5mから27.5mまで、南では27.25mから27.75mまで、北では27.75mから29.5mまでである。裾と同じく、1～2mほど北が高くなっている。この疎となる部分が1段目のテラス部分と考えられる。この部分で幅6mを測る。そして、密になり始める27.5mから27.75mが2段目の築成が始まる地点である。ここで、径22m、高さ約3.3mとなる。

次に周濠をみてみたい。北西の牧草地で幅11～13mを測る。牧草地内の起伏はあまりないが、墳丘側が10cmほど高い地点がある。南西から南の水田では幅11～15mを測り、水田で水田内の高低差はほとんどなく、平坦である。南東から東にかけての水田は、用水路の改修で原形をとどめていないが、おそらく、幅15m前後の周濠がめぐっていたと考えられる。北東の周濠も同様で、幅15mである。この範囲を考えて、墳丘中心から同心円を描くと幅15mでうまく合致する。こう考えると、周濠を含めた大きさは径70mである。東の畦畔や南の池が原状をとどめている可能性がある。そこまで含めると、幅25mの周濠がめぐる径90mの大円墳が復元できる。しかし、これにはかなり無理があり、前述の70mが妥当であろう。

周辺の地形をみると、県道をはさんだ北は、北へいくに従って1段ずつ高くなり、27m前後となる。北西も同じである。西は、25.7m前後と北西の牧草地内とよく似ているが、水田面よりは1段高くなる。また、南は南へいくに従って下がり、23m前後となる。東も下がっていき、24.4m前後である。つまり、北西から南東へ下がる自然の傾斜面があり、その中央に土成丸山古墳が築造されたと言える。しかも、二段築成された墳丘の一段目と二段目の径が1：2、同じく高さは1：1となる。また、周濠の幅と墳丘の径の比が3：4となる。土成丸山古墳は前方後円墳にも匹敵する設計思想で設計された古墳と言えよう。

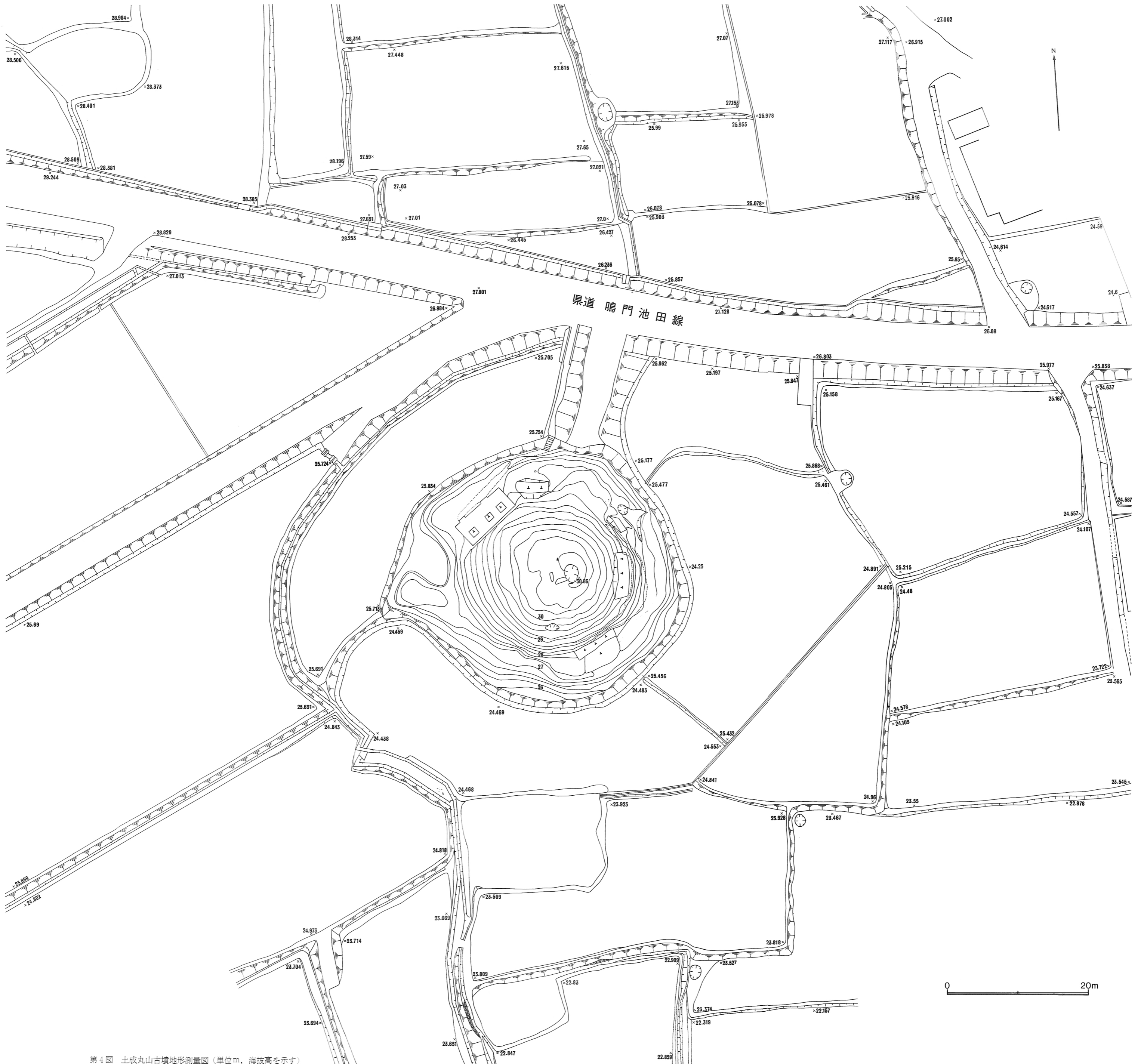
3) 採集埴輪の整理

今回の調査に伴い、埴輪片を30点余り表面採集した。良好な状態のものは少ないが、特徴的なものをとりあげて、報告したい。

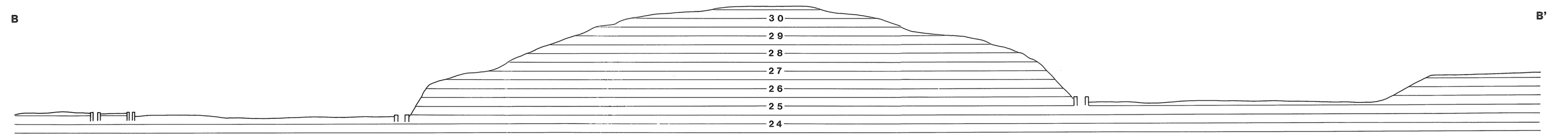
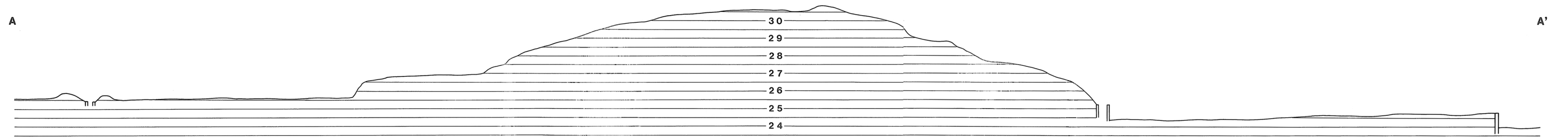
埴輪は墳丘テラス面、墳裾、周濠部から採集され、形象埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪に分けられる。

1 形象埴輪 (第7図1, 2)

1は、胎土に5mm大の小岩粒を含み、焼成はやや良で、淡褐色、断面黒色を呈する。摩滅が著しいが、表面には鋸歯状にヘラ描きを施した後、上部に一条の沈線を施したものであろう。おそらく、盾か靴形埴輪と考えられる。



第4図 土成丸山古墳地形測量図（単位m，海拔高を示す）



第6図 土成丸山古墳墳丘断面図 (単位m, 海拔高を示す)

0 10m

2は、胎土に石英粒を含む2mm大の小岩粒を多く含み、焼成はやや良で、暗褐色、断面黒色を呈する。表面に凸帯の剥離痕が認められるほかは、摩滅のため調整は不明である。方形透孔が認められ、器壁が曲面を描かないことから、家形埴輪と思われる。

他に、馬形埴輪などの脚部かと考えられる細片も採集されている。

2 朝顔形埴輪 (第7図3)

3の頸部破片のみで、胎土に石英粒を含む5mm大の小岩粒を多く含み、焼成はやや良で、黄褐色、断面黒色を呈する。頸部に断面三角形の凸帯を有する。外面は、凸帯貼り付けの際のナデ調整のほかは摩滅のため不明で、内面は、頸部の上下に稜を有するように強くナデられている。また、粘土紐の積み方が左右異なっている。

3 円筒埴輪 (第7図4～7, A, B)

円筒埴輪は、採集された埴輪の大多数を占める。

4は、胎土に1mm大の砂粒を含み密で、焼成は良好である。器厚1cmを測り、淡褐色で、断面台形の凸帯を有する。外面は2次B種ヨコハケ、内面はナデが施されている。

5は、胎土に石英粒を含む5mm大の小岩粒を多く含み、焼成はやや良である。径22.7cm、器厚1cmを測り、褐色で、断面台形の凸帯を有する。摩滅が著しいが、外面は1次タテハケのみ、内面はナデと思われる。

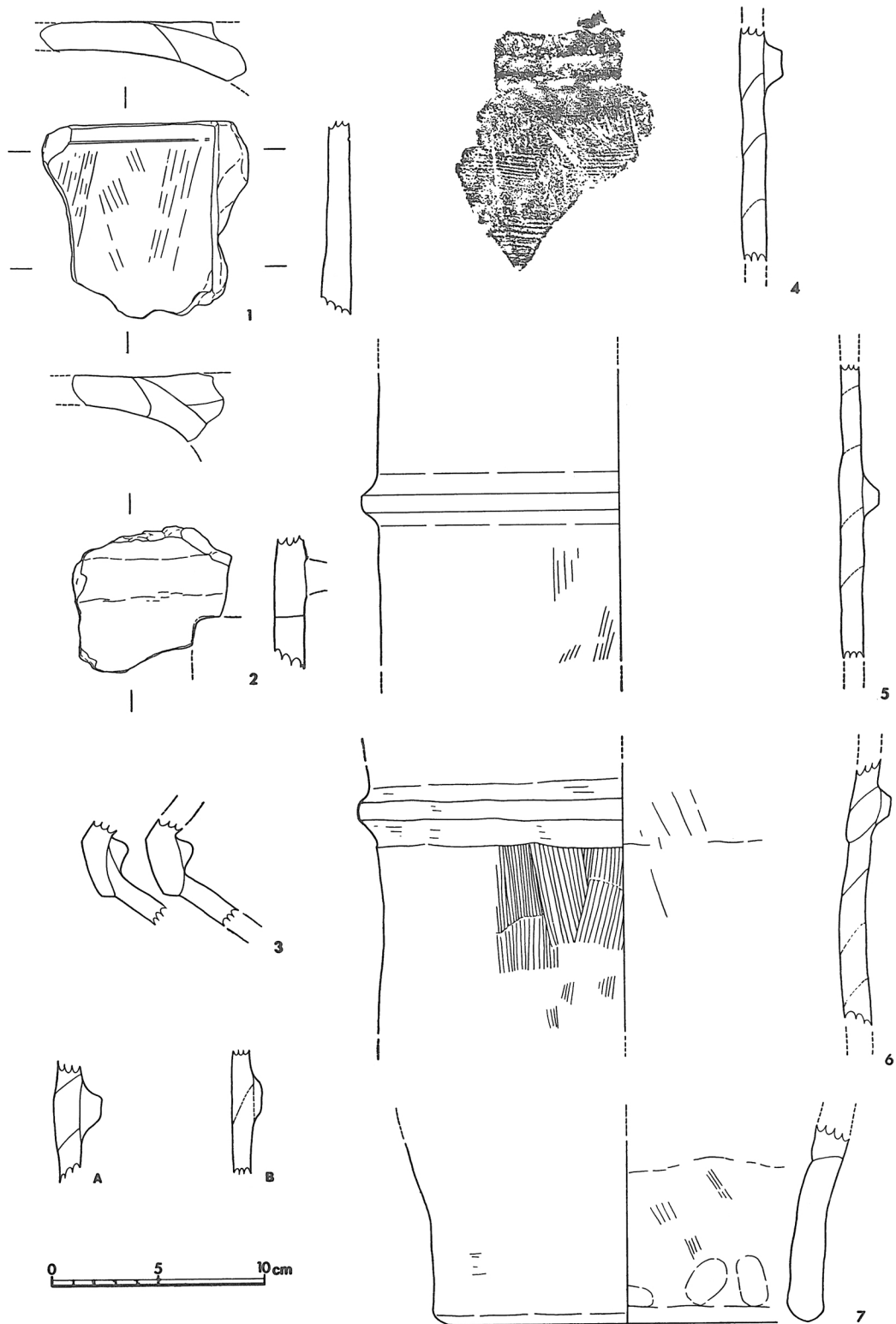
6は、胎土に石英粒を含む2～4mm大の小岩粒を含み、焼成は良好である。径23cm、器厚1.2cmを測り、淡黄褐色で、断面台形の凸帯を有する。外面は1cm当たり6～8条の一次タテハケのみ、内面は、斜位のナデが施されている。

7は基部片で、胎土に石英粒を含む3mm～1cm大の小岩粒を含み、焼成はやや良である。径18.4cm、器厚1.6～2.5cmを測り、上方に向かい開き気味である。外面褐色、内面暗褐色で、基部は板づくりである。摩滅が著しいが、外面はヨコハケ、内面は下部に指押さえ、上部にナナメハケが施されている。

これらを含め円筒埴輪の特徴をあげると次のようになる。1 褐色の焼成のよくないものと淡黄褐色の焼成のよいものがある。2 調整は外面が2次B種ヨコハケあるいは1次タテハケのみ、内面がナデ、ハケである。3 透孔の形状は不明である。4 凸帯は断面台形のしっかりしたもの(第7図A)と突出度の低いもの(B)がある。5 口縁端部は平坦な面をもつ。6 黒斑、基部調整は認められない。

以上のうち、B種ヨコハケ、凸帯(A)、無黒斑、基部調整のない点は川西編年のIV期、1次タテハケのみ、凸帯(B)はV期に相当する。全体的に考えて、本古墳の円筒埴輪はIV期^{註(1)}の終末段階からV期にかけての時期だと考えられる。県内での埴輪の比較資料が不足していることと、本古墳の内部構造、遺物が不明であることから、積極的に実年代を与えることはできないが、川西編年によれば、5世紀後半から末にかけての頃をみて差し支えないだろう。

註(1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978年



第7图 埴輪実測図

3 考 察

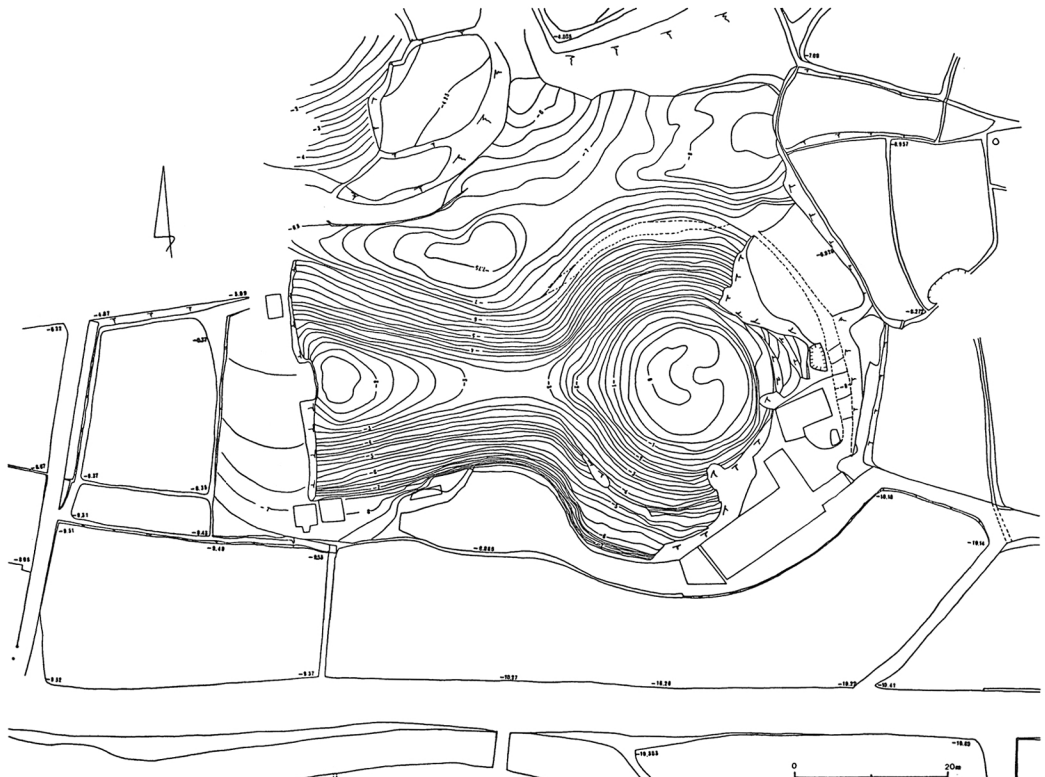
土成丸山古墳は、内部主体は不明であるが、採集した埴輪片から川西編年のIV期からV期にあたり、5世紀後半から末の築造と考えられる。この時期は、^{註(1)} 県下の古墳築造の少ない時期である。特に県下の中心的古墳群である気延山古墳群では空白となる時期である。

この時期に造営された代表的な古墳は、天河別神社古墳群である。4号墳の前方部裾に幅2mの溝がめぐり、その中から5世紀後半の器台が出土している。また、すぐ東の宝幢寺3号墳は径11.3m、高さ50cmの円墳で、^{註(2)} 出土品などから5世紀後半と考えられている。また、眉山の南の恵解山古墳群も1・2・8号古墳は、この時期に該当すると考えられる。^{註(3)}

4世紀後半に前方後円墳などが造営され、5世紀中葉の渋野丸山古墳でその頂点を迎える。

渋野丸山古墳は、1970年の徳島考古学研究グループでの調査で規模が明らかになった。それによると、全長80m（復原推定長90m）、前方部幅32m、長さ33m、高さ6m、くびれ部幅21m、後円部径45m、高さ10mの3段築成の前方後円墳で、南から東にかけて幅17mの周濠が回る。土成丸山古墳は、これを一回り小さくした規模である。^{註(4)}

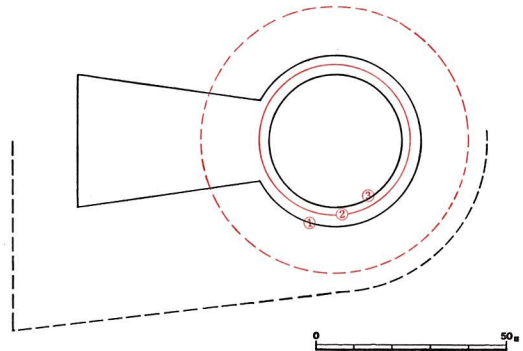
土成丸山古墳より1世紀ほど下るが、段ノ塚穴（太鼓塚）と比較してみたい。太鼓塚は、東西37m、南北33m、高さ10mの円墳である。高さではやや劣るが、墳丘はこれを1回り大きくした形である。^{註(5)}



第8図 渋野丸山古墳実測図（『徳島考古』第2号）

渋野丸山古墳，土成丸山古墳，段ノ塚穴（太鼓塚）の墳丘の大きさを比較してみると第9図のようになる。

40mという長さは，徳島県の前方後円墳の最も一般的な全長を示す。周濠部分も含めて70mというと，渋野丸山古墳に次ぐ規模となる。しかも，このような比高差0mという平地の築造は数少ない。吉野川の氾濫原に築造された足代東原遺跡くらいである。足代東原遺跡は，1号墳が前方後円状の積石塚である。この1号墳を



第9図 ①渋野丸山古墳・②土成丸山古墳・③段ノ塚穴（太鼓塚）比較模式図

中心に46基以上の積石墓が集中した遺跡である。1号墳は，全長16.5m・後円部径11m・前方部長5.5m・前方部幅4m，高さ40cmという小規模の積石墓であり，庄内並行期に位置づけられている。

以上から，土成丸山古墳は，渋野丸山古墳に後続して5世紀後半に築造された盟主的古墳である。^{註(6)}この周辺には，宝幢寺古墳群，愛宕山古墳といった前方後円墳を中心とした古墳が4世紀後半に展開する。これに引き続いて，天河別神社古墳群が築造され，これとほぼ同時期に土成丸山古墳が築造されたといえる。

ところで，土成丸山古墳の立地する周辺地域は，阿波国造である「粟凡直」一族の濃密な分布地と推定される。

『続日本記』神護景雲元年条には，「阿波国板野名方阿波等三郡百姓言。己等姓。庚午年籍被記凡直。唯籍皆着費字。自此之後。評督凡直麻呂等披陳朝庭。改為粟凡直姓。己畢天平宝字二年編籍之日。追注凡費。情所不安。於是改粟凡直。」とある。

このことから，名方郡，板野郡，阿波郡といった地域に粟凡直姓が特に多かったことが理解できるが，名西郡石井町中王子神社に伝わる養老7年の阿波國造粟凡直弟臣墓碑銘や延喜2年の板野郡田上郷戸籍においても顕著である。なかでも，土成丸山古墳の周辺は，粟凡直一族の本貫地ではないかと推定される。

土成丸山古墳は，規模・年代からみて，国造粟凡直と直系の被葬者ではないかと考えられる。

阿波国の阿波郡の重要性は今後大いに検討すべき課題であるが，その鍵をこの土成丸山古墳は握っている。

註(1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（前掲書）

註(2) 立花博・菅原康夫『天河別神社古墳群調査概報』徳島県教育委員会 1980年

註(3) 菅原康夫・河野雄次・林 慎二『萩原墳墓群』徳島県教育委員会 1983年

註(4) 徳島考古学研究グループ「渋野古墳群の研究」『徳島考古』第2号 1985年

註(5) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一樣相—その2—」『徳島県博物館紀要』第8集 1977年

註(6) 菅原康夫「徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報』35 1985年

註(7) 池邊 彌『和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館 1970年

註(8) 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978年



写真1 墳丘全景（東から見る）



写真2 墳丘遠景（西から見る）
手前の▼は消滅した態ノ庄古墳



写真3 東側墳丘（北から見る）



写真4 西側墳丘（北から見る）



写真5
西側周濠（南から見る）

写真6
西側周濠（北から見る）



写真7
東から南にかけての周濠

写真8
西から南にかけての周濠



「蜂須賀侯日光参詣絵巻」についての二・三の考察

山 川 浩 實

はじめに

近世大名を題材として描かれた絵巻は、参勤交代の^{ともだて}供建を克明に描いた「参勤交代図」をはじめ、藩主代替り時の「初登城図」や、「鷹狩図」^{註(1)}、「軍列図」^{註(2)}、「参詣図」など、その内容は多様である。阿波国徳島藩の場合、藩主蜂須賀侯を題材として描かれた絵巻として、参勤交代の供建を描いた「み^なとものつら絵巻（蜂須賀齊裕公参勤交代行列絵巻・蜂須賀茂韶公参内絵巻）」^{註(3)} 3巻（森瀬魚親画）、「齊裕公御鷹狩図」^{註(4)}（伝同人画）、「徳島藩軍列絵巻」^{註(5)}、「蜂須賀侯日光参詣絵巻」^{註(6)}などが伝存する。これらの中で、過去に年代・筆者をはじめ、供建の構成などが考証された絵巻はほとんどなく、ことに「蜂須賀侯日光参詣絵巻」については、現在、年代・筆者をはじめ、供建の構成、派遣の武士に関する重要事項はまったく明らかではなく、その全容は不明である。

そこで小論では、本絵巻に関し、本図に記された多数の徳島藩武士の姓名から、年代ならびに供建の構成について、若干の考察を行い、博物館資料としての今後の活用化を図りたい。

(典 則)

註(1) 上野国前橋藩主「松平紀五郎初登城図」^{註(1)}、群馬県立博物館蔵。

註(2) 徳島県博物館蔵。

註(3) 徳島市豊田進氏蔵。

註(4) 徳島市坂崎正氏蔵。

註(5) 徳島県博物館蔵。

註(6) 「齊裕公御鷹狩図」については、香川県の歴史学者猪熊信男博士の奥書と、「みとものつら絵巻」については、明治18年の小杉楳邨の奥書がある。

1 「蜂須賀侯日光参詣絵巻」について

1) 伝 来

本絵巻は、昭和34年徳島市の三谷貴啓氏の寄贈にかかるものである。同氏は蜂須賀家の蔵品売却に携わった人物で、同氏の談によれば、本絵巻は、もと蜂須賀家の常三島の蔵に所蔵されていたもので、昭和23年の蜂須賀家の蔵品売却に際して世に出たものと言われる。当時、本絵巻は、他の3～4巻の卷子本と共に、内面を黒漆で塗布した桐材の小長持の中に嚴重に納められ、長持は助任川の氾濫に備えて浮游の工夫がなされていたと言われる。

したがって本絵巻は、もと蜂須賀家に所蔵されていた絵巻であることに疑いない。

2) 現 状

法量は、縦34.3cm、見返横30.4cm、本紙横985.5cm、軸付横28.4cm、全長1,044.3cmで、縦幅ならびに本紙の長さは、近世の絵巻としては、ほぼ通常の長さを有している。表具は元来、本紙の巻頭部が損傷したため、後世全面的に改装されており、本来の緒・題箋（簽）・表紙・八双・見返・軸付・軸の装丁については窺い知ることとは不可能である。

箱は竹釘を用いた古い桐箱で、箱表に「保第四拾参號」と朱書の蔵番号の紙片が貼付され、上部に「蜂須賀家日光社参行列巻物」と記された紙が貼付されている。しかしこの外題の表現は、江戸期の表現としては妥当と考えられず、しかも墨書された書体も江戸期のものとは考えられない。恐らくこの外題は、後世における改装時に付されたものであろう。

したがって本絵巻の外題は、「蜂須賀家日光社参行列巻物」とあるが、これは画図製作当初の外題とは考えられず、ここでは「蜂須賀侯日光参詣絵巻」の外題を用いることとする。

3) 内 容

紙本着色。画図の構成は、大きく分類すれば、前・中・後の3部構成で、前より徒士組、藩主・重臣、又供・仲間の各供建の3部に分類することができる。

画図は見返に続き、日光東照宮の石鳥居から始まり、それに近づく徳島藩の2名の武士に続いて、藩の長延な供建が描かれている。天地は截切で、共に大勾雲法たいこうの雲画法で雲が表現され、雲の上・下限間に供建が長く配されている。雲間に描かれた供建は、すべて鈎勒法こうりくによる描画法であるが（図1）、うち藩主の駕籠廻りの人物については、金泥による鈎勒法が用いられ、沿道には霞を表現した多量の銀粉が供建の始終間に散らされている。描かれる人物は214名で、うち96名の武士には、胡粉を塗布した長方形の枠内に、金泥で徳島藩の多数の武士の姓名が記入されている（図2）。同時に牽馬・召馬・召替馬等の駒名にも



図1 鈎勒法による描画



図2 武士名の記入

同仕法で駒名が記入され、その風雅な駒名を知ることができる。

人物の表情は、ほとんど眉毛と眼を下げた画一的な表情で描かれるが、214名中、ごくわずかな人物については、眼を上げた比較的 厳しい表情で描かれている。顔面の描画は、前額部から眉間・鼻・下顎にかけて、僅かに顔料を塗り残す技法が用いられ(図3)、表情の画一化を防いでいる。



図3 顔面の描画

用いられる色は、白・赤・黒・金・褐・紺・青・緑が基調で、主として、白は武士の家紋、赤は召具装束・挟箱ならびに馬具の三繫(懸)、黒は小袖・鞆・挟箱、金は蜂須賀家家紋、褐は素襖・水田籠(飼葉籠)、紺は袴・小袖・素襖、緑は馬氈・小袖・狩衣などに用いられている。全体として、顔料は薄く、紫土(弁柄)と思われる赤色の顔料のみが鮮烈な色調を見せている。

註(1) 蜂須賀家の蔵品売却については、昭和8年の第1回の売却を嚆矢とし、続いて戦前の第2回、昭和23年の第3回の売却がある。

うち同氏は、第3回の蜂須賀家の蔵品売却に対し、同家よりその売却を依頼された。

註(2) 昭和62年2月3日談。

2 供建の構成

1) 前列

前列の供建は、主として徒士組を中心とした構成で、石鳥居に近づく2名の武士に続いて、牽馬・傘・挟箱・撞木槍・徒士組で構成されている。

先頭の2名の武士は、姓名が記されずその身分は未詳であるが、後続の徒士組と比較して、上下共に裂の半上下の着用から、先払の徒士と考えられる。これに続いて、白張の召具装束を着用した牽馬・傘・挟箱・撞木槍の仲間・小者を主とする仕丁が続く。

牽馬は2頭で、それぞれ馬取2名、水田籠1名で組織される。牽馬は共に、虎皮の豪華な馬氈を置くが、この馬氈は藩主の召馬ならびに召替馬のみに用いられている。虎皮の馬氈は、「みとものつら絵巻」の藩主の召馬・召替馬にも描かれており、また陸奥国「南部藩参勤交代図巻」によれば、同藩主の召馬・召替馬にも虎皮の馬氈が用いられている。牽馬の三繫は、中列に描かれる召馬・召替馬や、重臣が用いる替馬の三繫と比較して、その色が大きく異なり、しかも牽馬は供建の先頭に配されることから、この2頭の牽馬は、日光東照宮への形式的な献上馬として、供建に具備されたものと解釈される。

註(3)

牽馬に次いで、徒士2名による傘持が配されるが、本絵巻には、これ以降、徳島藩の家中（藩士格武士）を主体とする多数の武士の姓名が記されている。最初に姓名が記された武士は、徒士の^(松) 桑井芳吉（台左衛門）・村上延太で、村上は後年徒士格の下級士から^{ひらし}平士格（200石）の中級士に立身した異例の人物で、白い傘袋に納められた「御長柄傘」⁽⁴⁾を持つ。挟箱⁽⁵⁾一对は、4名の仲間が携わり、挟箱にはその上部を覆った赤地の油単に、金泥で蜂須賀家の丸に左万字の家紋が付されている。撞木槍⁽⁶⁾一对は、挟箱同様、4名の仲間と思われる小者が携わり、撞木は蜂須賀家の「御定御武具図式全」によれば、幅8寸、長さ1尺ほどで、丁字形を有し、材は羅紗（黒）が用いられるとされる（図4）。この撞木槍は、「南部藩参勤交代図巻」にはまったく見られないが、「みとものつら絵巻」の「参勤図」・「参内図」の両巻には明瞭に描かれており、しかも文化8年（1811）・文政12年（1829）の両度にわたる蜂須賀家の日光参詣時にも、その一对が用いられている⁽⁷⁾ことから、撞木槍は蜂須賀家の供建における常備槍であったと考えられる。

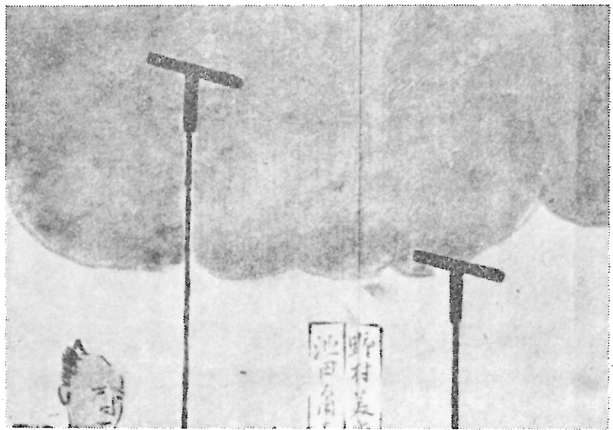


図4 撞木槍

この撞木槍に続いて、前列の主軸をなす徒士組20名が連なり、中列へと続く。老齡の徒士、板東吉郎に引率された徒士組は、同一に共裂の半上下を着用し、袴の裾を^{から}絡げて2列横隊の隊列を編成する。

この撞木槍に続いて、前列の主軸をなす徒士組20名が連なり、中列へと続く。老齡の徒士、板東吉郎に引率された徒士組は、同一に共裂の半上下を着用し、袴の裾を^{から}絡げて2列横隊の隊列を編成する。

徳島藩の徒士は、天明4年（1784）歩行から徒士に改称されたが、その人数は、天保五年（1834）段階で90人が確認される。禄は3人扶持支配8石が通例で、役職は奥女中を監視する奥目付や、供目付・不寝番などに⁽⁸⁾当てられる。絵巻に姓名が記された徒士は、板東吉郎（元利）を初め、小出祐太（直甫）・加田仁左（右）衛門（湿厚）・桜間康郎（能道）・吉成角次郎・美馬左之丞・河野太三郎（致知）・河野富蔵（利恭）・岡田勇吉・高田邦蔵（泰一左衛門・斐成）・樋富猪藤太（右史）・三浦勝次郎（延寿）・岡儀之丞（居啓）・矢嶋権郎（茂之）・福永小源太（基直）・野田伴助（清平）・庄野岩三郎（守順）・青山芳蔵（芳吉・義正）・横山甚五郎（近義）・川嶋団之丞（正一）の20名で、文久元年（1861）全家中が藩に提出した各家の「成立書并系図共」によれば、彼らの大部分は、幕末の嘉永年間藩に勤仕していたことが知られる。したがって、本絵巻に描かれた蜂須賀家の日光東照宮の参詣は、嘉永年間頃に行われたものと推察される。⁽⁹⁾

うち小出・加田の両名については、跡式相続以前にこの参詣に派遣され、矢嶋はこの参詣後、徒士支配手許役（徒士小頭）に立身している。⁽¹⁰⁾
⁽¹¹⁾
⁽¹²⁾

2) 中 列

中列の構成は、供建の中心をなすもので、藩主と重臣を中心として構成されている。前者は、藩主



図5 錫杖槍

の駕籠廻りに平士と供小性が固め、先供に長刀・錫杖槍、跡供に腰物筒・十文字槍・傘・挟箱・茶弁当・召馬・召替馬が配されている。後者は、3名の馬上の重臣を主として、馬丁・又供・一文字槍・挟箱・傘・水田籠でそれぞれ組織されている。

前列の徒士組に続いて、まず中列の先頭には、長刀を持つ徒士とその介添、続いて錫杖槍持が配されるが、長刀を納めた紺地の袋には、蜂須賀家の家紋が白く染め抜かれている。これに続く錫杖槍は、蜂須賀家の特異な槍で、「みとものつら絵巻」の両巻にもその1条が描かれ、しかも文化8年・文政12年の両度にわたる蜂須賀家の日光参詣時の供建にも用いられている(図5)この槍は、錫杖頭部の宝珠を形どった槍穂筒註(13)に一文字槍をかぶせたもので、宝珠を形どった穂筒は、「みとものつら絵巻」同様、金泥で描かれている。元来錫杖槍は、慶長5年(1600)関ヶ原の合戦に際し、先代藩主蜂須賀家政が高野山で剃髪後、阿波に持ち帰ったとされる錫杖に似せたもので、この錫杖槍は、昭和23年まで蜂須賀家の常三島の蔵に所蔵されていたと言われる。

藩主の駕籠は、本絵巻の中心をなすもので、先供の長刀・錫杖槍に続いて、中列の前半部に配されている。駕籠の前後・左右は、侍烏帽子えぼしを冠し、略式の打掛、素襖を着用した16名の平士が厳重に警固し、さらに6名の供小性と、数名の供目付がこれに従っている。藩主の駕籠は、外面に網代あじろを張った腰黒網代駕籠で、前方と左右にそれぞれカ所の御簾みすが設けられている。この御簾は、文政12年に行われた蜂須賀家の日光参詣には、道中においてこれを降ろす旨、指示されている。藩主の駕籠は、「みとものつら絵巻」に描かれた藩主の駕籠と比較して、無勾配の屋根が異なる程度で、他はほとんど明瞭な差違を生じない。

駕籠廻りを警固する武士は、200～300余石の石高を有する中級士の平士で、絵巻に姓名が記された平士は、大日方左太之丞(小川茂作・勝実)・長江六之助(貞景)・樋口才左衛門(正史)・前野延左衛門(信之)・浅田久米之丞(章胤)・岩田量助(長精)・森田勘兵衛(孝尚)・森宅兵衛(景敏)・皆月庄左衛門・萩野吉之進・武谷満介・渡辺久米蔵・若山正之助(八十郎・勝長)・稲田幾太郎・井上半助(高迢)の15名で、絵巻に描かれた人物より、1名の姓名記入の欠落がみられる。

うち若山正之助は、後年藩の命を受け、幕府砲術指南役高島秋帆の下で西洋砲術を研さんし、徳島藩に高島流オランダ西洋砲術を伝えた人物として著名である。また大日方・森田両名については、いずれも嘉永元年(1848)宛行・役儀召放の処分を受けたが、翌年の「分限帳」にはいずれもその名が見られ、しかもこの頃行われたと思われるこの日光参詣註(16)の供廻として派遣されている註(17)。

平士に続く6名の供小性は、平常広間番を務める藩主親衛の大小性で、早川庸太(吉)郎(清魚)・小出一之助(直照)・村田愿三郎・渡辺勝之進・祖父江友次郎(宜伊)・和田泰之丞(安成)の姓

名が記され、うち1名は絵巻より消略されている。腰物筒に続く供目付は、供建の卒類監視を目的として派遣されるが、この役職は、徒士支配手許役と共に、徒士が務める最高の役職で、「成立書」から2名の供目付が確認される。

これに続いて、^{註(18)} 絵巻は主として召具装束を着用した藩主供建の多数の仕丁が描かれている。一文字槍に続く長柄傘と草鞋取は、退紅を着した召具装束で、さらに3名の徒士に続いて、挟箱・茶弁・召馬・召替馬が配されている。藩主供建の総数はおよそ35名で、その多くは白張の召具装束を着用する。藩主の召馬の馬副は11名で、馬丁6名の外、^{ばすい} 馬箠（鞭）・馬杓・挟箱・水田籠で組織される。「風蹄」と駒号が付された召馬は、鞍を置いた装備で、赤色の三繫と、鞍下には淡い緑の^{したぐら} 轡に虎皮の馬氈が装備されている。鞍は黒漆塗りの鞍に紺色の^{くろしき} 鞍褥を用いた大和鞍で、前輪・後輪・居木にはいずれも蒔絵は施されない。馬氈は供建の先頭に配された2頭の牽馬と同様、虎皮の馬氈が用いられ、鍙は黒漆塗りの木鍙で、その踏込は金泥で描かれている。これに対して、召替馬は「芙蓉」と駒号が付され、馬丁（2名）・挟箱・水田籠の4名で組織される。鞍・鍙は共に装備されるが、その全面は、虎皮の馬氈によってほとんど被覆されている。

以上の藩主供建に続いて、中列の後半には、3名の重臣による多数の供建が配されている。供建の総数は37名で、先頭を騎馬で進む佐野武兵衛（惟寛）と、これに続く騎馬の伴剛太郎（倫一）は、共に平士格の奥小姓で、両者はいずれも350石の石高を有する。これに対して、後方を騎馬で進む^{おきえ} 押の梯与一左衛門（克謙）は、560石を有する^{ものがしら} 代々物頭席^{註(19)}の上級士で、梯はこの日光参詣の総指揮を取る道中奉行の地位にあったと考えられる。うち先頭の佐野は、藩主の駕籠廻りを警固する平士の武谷満介と共に、文政12年に行われた蜂須賀家の日光参詣に続く再度の派遣である。3名の重臣は、いずれも御目得以上の武士が着する^{かざおり} 狩衣と、風折烏帽子を冠した礼装で、^{註(21)} 多くの従者を従え藩主の供建に続く。

重臣の馬具は、ほぼ同一でそれぞれ明瞭な差違はみられないが、藩主召馬の馬具に比べて、いずれも虎皮の馬氈と厚^{あつがき} 総の尻繫^{しりがい}が見られず、馬具の装備において、両者間に大きな差違を有している。

供建の構成は、馬丁・又供・一文字槍・挟箱・腰物筒・傘・草履取・水田籠で組織されるが、さらに奉行の供廻には、これに警固の武士6名が前後を固めている。重臣の供建に配される挟箱や長柄傘は、藩主供建に配される挟箱・長柄傘に比べて、前者は家紋がまったく付されず、後者は傘袋・紐の色が大きく異っている。しかも仲間の衣服も、藩主供建の仲間の衣服に比べて、帯・襟の色が明瞭に異っており、近世封建制における大名・家臣、直臣・陪臣間の著しい身分格差を示している。

3) 後 列

後列の供建は、主として又供・重臣替馬・釣台で構成される。その総数は、絵巻に記された供数から計算すれば161名であるが、うち又供のおよそ90名の人物については、絵巻より消略されている。後列の供建に配される従者は、前・中列の従者と比べてその身分が低く、後列の供建では、前・中列の供建とは異なり、まったく従者の姓名が記されず、供数と駒号のみが記されている。

中列の最後部に配される奉行の供廻に続いて、まず後列の先頭には、陪臣の武士ならびに仲間の集

団が配され、この集団は絵巻上部に、「又供百三拾一人」と供数が記されている。彼らは藩主の供廻に配された徒士や仲間と比べて、陪臣は紺色の半上下の色が薄く、仲間は帯・襟の色が大きく相違する。仲間・小者が着用する衣類の質については、絵巻より確認できないが、徳島藩の藩法「元居書拔」に、「諸下代・弓鉄炮者、其外末々之扶持人共衣類木綿布可着之。帯・襟・袖継等之義、加賀絹以下可用之」とあり、仲間が着用する帯などは、主として裏地に用いられる加賀絹などの粗末な絹布であったことが知られる。これに続く長柄傘と挟箱は、それぞれ7名の仲間で組織され、この集団の後に押として3名の武士が配されている。この武士は、姓名が記されずその役職は不明であるが、供建の構成から、多数の陪卒を監視する役職の武士と考えられる。

これに続く2頭の重臣の替馬は、馬丁(2名)・水田籠の3名でそれぞれ組織され、後半の釣台へと続く。重臣の替馬は、藩主召替馬の馬副と同様、いずれも白張の召具装束を着用する。2頭の替馬は、藩主召替馬の馬具と比べて、虎皮の馬氈が見られないのみで、他は藩主召替馬の馬具と同様、鞍・鐙・馬衣・尾韜(袋)が装備されている。

重臣の替馬に続いて、絵巻は後列の最後部に釣台7荷と、供建最後の武士が描かれるが、蜂須賀家の長延な供建は、この最後の武士をもって終了する。7荷の釣台は、それぞれ2名の仲間が1組となって前後を担うが、絵巻上部に「釣台持式拾一人」と記されていることから、3荷7名が絵巻より消略されている。したがって本来、釣台は10荷で構成され、1名の小頭と20名の仲間によって組織されていたことが知られる。釣台は主として、道中の諸道具を運搬する道具で、文政12年に行われた蜂須賀家の日光参詣では20荷が用いられ、うち1荷には傘40本が常備されている。これに続く供建最後の武士(3名)は、姓名が記されずその役職は不明であるが、供建の最後部に配されることから、主として仲間や小者を監視し、その列を整える役職の武士と考えられる。

以上のように、絵巻から蜂須賀家の日光参詣の供建をみてきたが、この供建は絵巻に消略された人物を加えると、317名にも及ぶ多数の直臣・陪臣団によって組織されている。江戸幕府は寛永12年(1635)の「武家諸法度」によって、諸大名に参勤交代制を義務づけ、その藩財政の弱体化を狙った。蜂須賀家の日光参詣は、「みとものつら絵巻」の「参勤図」に比べて、その供建には大差がみられないことから、この参詣に要した出費は多大であったと考えられる。

次に、この絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣の年代について、簡単に触れてみたいと思う。蜂須賀家の日光参詣は、元和7年(1621)の2代藩主忠英の参詣以降、嘉永2年(1849)の13代藩主斉裕の参詣に至るまで、江戸時代を通じて15回の日光参詣が行われている。うち初代・7代・9代・10代・14代の各藩主を除く大半の藩主は、それぞれの在任期に在府を機会として、春・夏期に日光参詣を行っている。家康を祭る日光東照宮の参詣は、蜂須賀家をはじめ幕藩体制下の大名にとって、対幕上極めて重要で不可避な参詣であったと考えられる。

絵巻に描かれた日光参詣の年代については、絵巻上部に記された徳島藩武士の藩勤仕時期から、その年代を促えることができる。絵巻に姓名が記された武士は96名で、うち各家の「成立書」からその約半数にあたる44名の武士について、その藩勤仕時期が知られる。その上限は、後列の先頭に配された佐野武兵衛の相続年度で、佐野は寛政9年(1797)義父量之助の跡目相続後、安政3年(1856)に没

するまで、59年間藩に勤仕している。下限は各家の「成立書」の記載が文久元年（1861）で終了するため、これ以降は不明であるが、うち明治2年（1869）の版籍奉還に至るまで藩に勤仕した武士も存在する。したがって絵巻に姓名が記された武士は、江戸後期において徳島藩に勤仕した武士であることは疑いない。⁽²⁶⁾

そこで彼らの勤仕時期を詳細に比較してみると、1名を除く43名の武士は、相続以前、藩士格立身以前も含めて、すべて嘉永元年（1848）～3年にかけて藩に勤仕していることが明瞭に知られる。したがって絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣は、幕末期の嘉永年間に行われたものと考えてよいであろう。その証左に、近年発見された徳島藩の藩撰史書「阿淡年表秘録・続篇」嘉永2年条に、⁽²⁷⁾「八月十三日公日光山御宮御霊屋御拝礼御願之通被蒙仰。廿二日江府出立、御宮江御太刀一腰、御馬一疋代黄金拾両、御霊屋江白銀拾枚御献上。九月三日御帰府」とあり、さらに「蜂須賀家記」嘉永2年条にも、⁽²⁸⁾「八月公詣日光山。拜東照・大猷二公廟。」とある。すなわち本絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣は、嘉永2年に行われた13代藩主斉裕による最後の日光参詣であったことが明瞭である。

最後に、以上促えられた諸点をもとに、絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣の供建を図示してみよう。

先 払	馬丁	馬丁	挟 箱	撞木槍				
— 牽	馬	水田籠	— 牽	馬	水田籠	— 長柄傘	—	— 徒 士
先 払	馬丁	馬丁	挟 箱	撞木槍				
徒 士	同	同	同 (以下略)		平 士	同	同	同 (以下略)
			— 長 刀	— 錫杖槍	—	仲間	御 駕	仲間 同
徒 士	同	同	同 (以下略)		平 士	同	同	同 (以下略)
供小性	同 (以下略)	?	供目付		草履取		徒 士	挟 箱
		—	—	— 一文字槍	— 長柄傘	同	— 徒 士	—
供小性	同 (以下略)	腰物筒	供目付		長柄傘		徒 士	挟 箱
	馬丁	同	同	馬籠	挟 箱	馬丁	挟 箱	仲 間
同	— 茶弁当	—	召 馬		— 召替馬	—	—	佐野武兵衛
	馬丁	同	同	馬杓	水田籠	馬丁	水田籠	仲 間
一文字槍	腰物筒	草履取		仲 間		又 供	一文字槍	腰物筒
			水田籠	— 伴	剛太郎			水田籠
挟 箱	長柄傘			仲 間		又 供	挟 箱	長柄傘
警固武士	仲 間			又 供		腰物筒	草履取	挟 箱
警固武士		梯与一左衛門		— 一文字槍				水田籠
警固武士	仲 間			又 供		長柄傘		挟 箱
		供目付?	馬丁		馬丁			
又供131人 (略)	—		— 重臣替馬	水田籠	— 重臣替馬	水田籠	— 釣 台	同 同
		供目付?	馬丁		馬丁			
		供目付?						
同 (以下略)	—							
		供目付?						

- 註(1) 太田孝太郎「南部藩参勤交代図巻」（奥羽史談会・昭和41年）。
- 註(2) 藩主・重臣の馬は、すべて三繫が赤であるが、牽馬は赤・紫・緑の三繫が用いられている。
- 註(3) 文政12年（1829）藩主斉昌は、日光東照宮へ参詣したが、宮へ御太刀2腰・御馬2疋代として、金10両外を寄進しており、現品の寄進がみられない（「阿淡年表秘録」文政12年条）。
- 註(4) 「村上延太成立書」徳島大学付属図書館蔵。
- 註(5) 「日光御宮御参詣一卷（文政12年）」（「阿波蜂須賀家文書」）国立史料館蔵。
- 註(6) 「阿波蜂須賀家文書」所収。
- 註(7) 前掲「日光御宮御参詣一卷（文化8年・文政12年）」。
- 註(8) 「嶋分イロハ付」（猪井達雄『稲田家中筋目録』3巻所収）。
- 註(9) 徳島大学付属図書館蔵。
- 註(10) 20名の徒士のうち、経歴の判明する16名については、嘉永年間藩に勤仕している。
- 註(11) 「小出直左衛門成立書」，「加田仁右衛門成立書」。
- 註(12) 「矢嶋権郎成立書」。
- 註(13) 前掲「日光御宮御参詣一卷」。
- 註(14) 三谷貴啓氏ご教示。
- 註(15) 前掲「日光御宮御参詣一卷」。
- 註(16) 「大日方権右衛門成立書」，「森田忠太成立書」。
- 註(17) 「嘉永二年分限帳」（徳島県博物館筆写本）。
- 註(18) 村田和太助（貞久）・服部権助（有恒）。
- 註(19) 「佐野武兵衛成立書」，宮本武史『徳島藩士譜』下巻（徳島藩士譜刊行会・昭和47年）。
- 註(20) 「梯英太郎成立書」。
- 註(21) 前掲「日光御宮御参詣一卷」。
- 註(22) 石井良助『藩法集・徳島藩』元禄9年（1696）条，（創文社・昭和37年）。
- 註(23) 前掲「日光御宮御参詣一卷」。
- 註(24) 元和7年（1621）・寛永13年（1636）・同17年・正保3年（1646）・慶安2年（1649）・承応2年（1653）・寛文9年（1669）・同11年・宝永3年（1706）・享保14年（1729）・宝暦元年（1751）・同3年・文化8年（1811）・文政12年（1829）・嘉永2年（1849）。（『阿淡年表秘録』）。
- 註(25) 「佐野武兵衛成立書」。
- 註(26) 供目付，村田和太助（「村田庸安成立書」）。
- 註(27) 徳島市史編さん室蔵。
- 註(28) 岡田鴨里編『蜂須賀家記』（明治9年・東洋社）。

おわりに

以上のように、蜂須賀家旧蔵の絵巻から、嘉永2年13代藩主斉裕によって行われた蜂須賀家の日光参詣の供建をみてきたが、この供建は、藩主の駕籠を核とし、317名にもものぼる多数の直臣・陪臣団によって組織された極めて多大な供建であった。この頃、徳島藩の藩経済は破たんの一途をたどり、この日光参詣が行われた同年には、藩士の禄10分の3を削減しなければならぬ状態であった。こうした状況において、江戸期最後の日光参詣を行った藩主斉裕は、元来11代將軍家斉の22子として、衰退する幕府権力の中で、家康を祭る日光社の最後の参詣を強行したのであった。

幸いこの供建については、絵巻上部に徳島藩武士の姓名が記されていたため、この経歴からその構成が促えられ、蜂須賀家の基本的な供建の構成を知ることができた。

最後にこの絵巻の筆者については、残念ながら、徳島藩御用絵師の中で、比定すべき人物が見当たらず、現在不明と言わざるを得ない。ただ、本絵巻には、藩主の跡供に中小性格茶道役の茶弁当掛梶真悦（旗山）が描かれていることが注目される。彼は同家の「成立書」によれば、日光参詣に派遣される直前、奥坊主から中小性格の茶道役に立身し、のち藩御用絵師の重鎮^{つらな}住貫魚と共に、藩主に随行して淡州・摂州などに赴いている。元来、彼は画業を本職とはしていないが、わずかに伝世する作品によって絵画を製作したことが知られる。中でも藩命による「阿波淡路両国産物誌」^{註(3)} 136巻の彩色図譜は、彼とその子英朴の2代にわたる苦心の作品で、その力量は高く評価されている。絵巻に描かれた人物の表現と、彼の作品との間には、比較的相似点も見出せるが、現段階では比定は困難である。しかし絵巻に描かれた茶弁当掛梶真悦の表情は、描かれる214名の多数の人物の中で、ただ一人眉毛を上げた異例の姿態で表現されている。（図6）今後の比較資料の発見を待ちたい。



図6 梶真悦

終わりにあたり、先学諸氏の忌憚ないご叱正を受けたいと思う。

註(1) 前掲『蜂須賀家記』。

註(2) 「梶真悦成立書」。

註(3) 東京国立博物館蔵。

日本産ラクダムシ類の研究 (1)

大 原 賢 二

はじめに

ラクダムシ類は、Neuropteroidea (脈翅上目) のラクダムシ目 (Raphidioptera) に属し、体長が10~20mm、前翅長が10~15mmの中型の昆虫で、センブリやクサカゲロウなどと近縁な一群である。

ラクダムシ目は、ラクダムシ科 (Inocellidae) とキスジラクダムシ科 (Raphidiidae) の2科に分けられており、我が国からは各科に1種ずつが知られている。すなわち、ラクダムシ科のラクダムシ (*Inocellia japonica* Okamoto, 1917) とキスジラクダムシ (*Raphidia harmandi* Navás, 1909) である。

ラクダムシは、海岸のマツ林や、内陸部の中~低山地で採集され、本州、四国、九州のかなり広い地域に分布していることがわかっている。

一方、キスジラクダムシは、原記載以来、採集記録が発表されることが少なく、以前は本州中部のみに分布するとされていたが、最近、紀伊半島、中国地方、九州などの記録が発表され (山下ら, 1972; 大原, 1983; 山屋, 1983; 川瀬, 1986a; 秋田, 1986; 阿部, 1987)、この種に関する情報も増えつつある。現在までのところ、本種は海拔1,000mぐらいの、原生林かそれに近い植生の地域で得られているが、いずれの場所でも得られた個体は極めて少ない。筆者は、このような局地的分布をする本種がはたして一種であろうか、という疑問を持ち、材料の入手に努めたが、各地の雄の標本を入手するのはなかなか困難で十分な検討を行えないままであった。

1985年に四国でキスジラクダムシの雄を採集し、この標本と愛媛大学農学部昆虫学教室所蔵の長野県産のキスジラクダムシの雄標本を比較する機会を得た。その結果、両者の雄交尾器の形態には明瞭な差が見られ、各地の標本を詳細に比較して分類学的再検討を行う必要があることがわかった。

本報告では、九州産のラクダムシと、長野県産のキスジラクダムシについて、それぞれの種の簡単な紹介と雄交尾器形態、及び今後の問題点について概説するが、調査個体が少ないことや九州や他の地域の雄はまだ十分に検討できていないために、学名の変更などの分類学的な問題は後日別報として報告する予定である。

なお、研究史や生態に関する報告としては、川瀬 (1986b) による報告が最も新しく、日本産のラクダムシ類に関するその時点までの概要がわかるので、ここではあまり詳しくは触れない事にする。

本文に入るに先立ち、貴重な標本の借用やデータの発表を快く御許可下さった愛媛大学農学部昆虫学教室の宮武睦夫助教授、文献や貴重な標本をお世話下さった九州大学農学部昆虫学教室の江田信豊博士、後藤忠男博士、小西和彦氏、阿部正喜氏と、広島県産の標本の借用と図の引用を快諾下さった

福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校の川瀬勝枝氏に心からお礼申し上げる。

I. ラクダムシ目および科の概説

ラクダムシ目はラクダムシ科 (Inocellidae) とキスジラクダムシ科 (Raphidiidae) の2科から成り、オーストラリアを除く世界各地に分布している。

各科の主要な形態的特徴はつぎのとおりである。

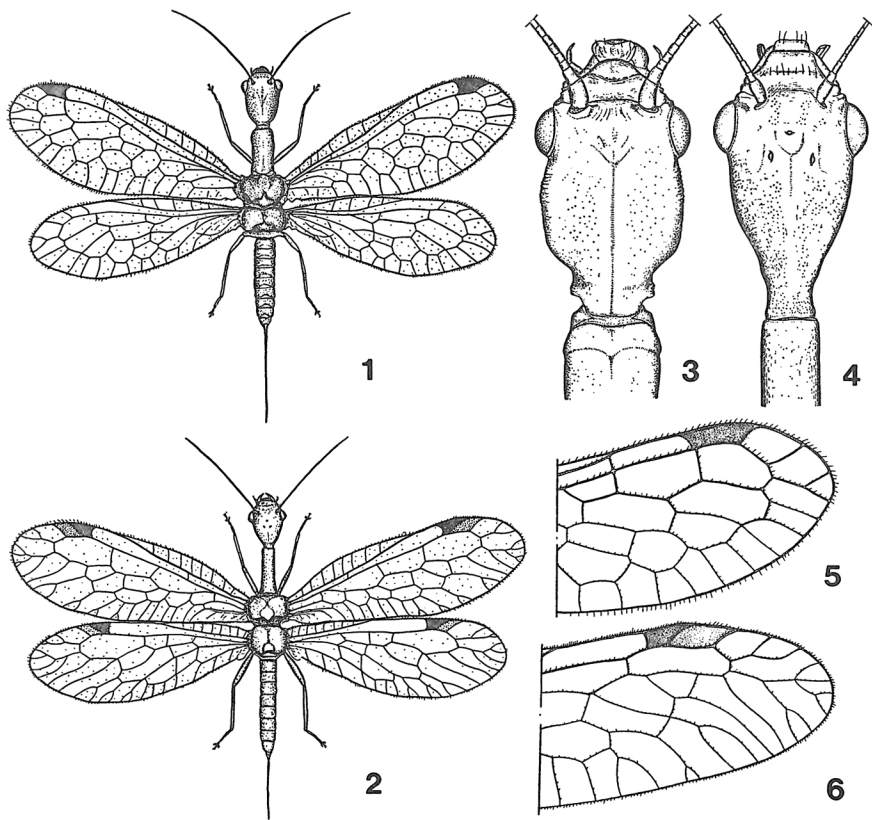
1. ラクダムシ科

単眼はない。翅の縁紋の中には翅脈をもたない—第1, 3, 5図。

Inocellia 属のみからなる。本属は7つの亜属に分けられており、日本産の種 *japonica* は, *Inocellia* 亜属に属すると思われる。

2. キスジラクダムシ科

単眼を3個もつ。翅の縁紋の中に1本の翅脈をもつ—第2, 4, 6図。



第1—6図. ラクダムシとキスジラクダムシ. 1, 3, 5, ラクダムシ. 2, 4, 6, キスジラクダムシ. 1, 2, 雌成虫. 3, 4, 頭部. 5, 6, 右前翅先端部.
(川瀬, 1986b より)

Raphidia 属のみからなり、47亜属に分けられている。日本産の種 *harmandi* は *Dichrostigma* 亜属に属すると思われる。

日本からは、現在それぞれの科に一種ずつしか知られておらず、科を区別する形質がそのまま種を識別する形質となっている。

II. 種の概説

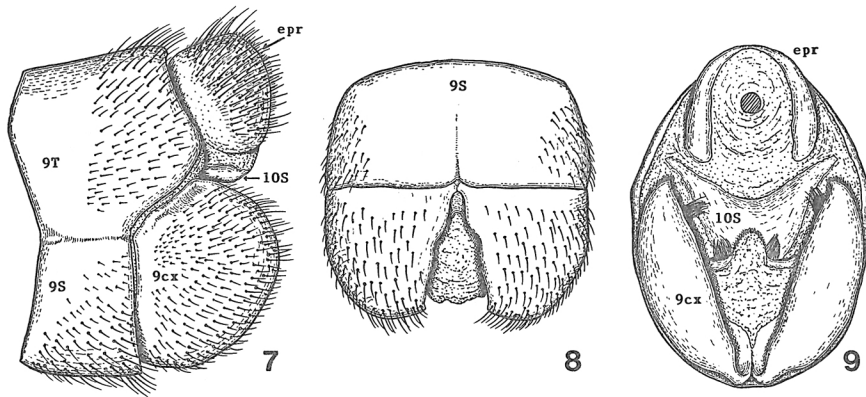
1. ラクダムシ (*Inocellia japonica* Okamoto, 1917)

ラクダムシは、Pryer 氏が横浜で採集した1雄1雌の標本に基づいて、MacLachlan が、旧北区に広く分布する *I. crassicornis* Schummel, 1832, として1875年に報告したのが我が国の最初の記録である。MacLachlan はヨーロッパや東部シベリアの標本と比較し「別種とするほどの差を見い出せないが、さらに検討をする必要がある。できるならアルコール液浸標本が望ましい」と注釈をつけている。この種名は、その後、松村松年(1907, 1931)や多くの研究者によって使用されたが、岡本(1917)は、成虫では差を見いだしにくい、外国で報告されている *I. crassicornis* の幼虫の記載と日本産のラクダムシの幼虫と思われるものは形態的にはかなり違っていることを指摘した。さらにこの報告の中で彼は、*I. crassicornis* の幼虫の記載に誤りがなく、自分が観察した幼虫から、日本で *I. crassicornis* とされている成虫が羽化したならば、たとえ成虫で区別しにくくても、これは別種とすべきであると述べ、もしそれが明らかになった場合には日本産のものには *japonica* と種名を与えたい、とした。しかしこの後も種名は変更されずに長い間 *crassicornis* が使用されたが、Kuwayama (1962)によって岡本の与えた種名 *japonica* がラクダムシの種名として生かされ、現在に至っている。

本種の幼虫は樹皮下で生活し、他の小昆虫などを捕食していると考えられている。成虫は5月から7月上旬ぐらいの間に発生し、年1化と思われる。福岡市近郊では海岸のマツ林に多産するが、内陸部でも採集されており(行徳, 1986)、図鑑等でもクヌギやナラの林に生息するとされている。しかしながら、諸外国の記録などからみても、基本的にはマツなどの針葉樹の樹皮下で生活すると思われる。

雄交尾器(第7, 8, 9図)

- ・腹部第9節背板(9T)、および腹板(9S)は側面で融合し、リング状となる。背板は大きく、背側面部は後方へ発達する。
- ・第9節の coxopodite(9cx)は、背板とは関節し、腹板とは狭い膜質部で結合する。内面後背部には黄色毛束をもつ。
- ・ectoproct(epr)は大きく、カプセル状。キチン化はやや強い。
- ・第10節腹板(10S)はectoproctの下面(腹面)側に明瞭に存在し、後方側面部は後方へ伸長す



第7—9図. ラクダムシ (福岡県福岡市産) の雄交尾器. 7, 左側面図. 8, 腹面図.
9, 後面図 (後面図の毛は省略).

る。腹方前縁は、亜方形で中央に伸びる小さな板状の突起を持った薄い骨片と関節結合 (articulate) する。Aspöck ら (1980) の gonarcus は、第10節腹板とこの骨片を合わせたものではないかと思われるが、種によってはこの部分が融合しているのかもしれない。筆者はこの骨片のみを gonarcus と呼ぶ。

・phallus 先端部は膜質で、*Raphidia* 属のものよりもはるかに短く、第9節の coxopodite よりもやや短い。phallus 背面部には1対の細長い骨片があり、これらの骨片の前縁は gonarcus に関節している。骨片の後端部には黄色毛の束をもち、毛は前方を向いている。

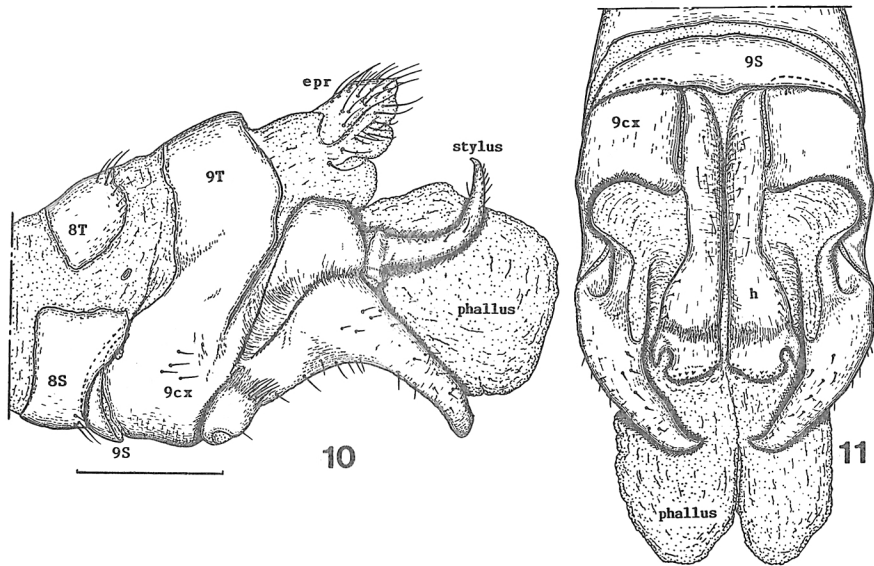
2. キスジラクダムシ (*Raphidia harmandi* Navás, 1909)

本種は、Harmand 氏が採集した標本をもとに、Navás が記載した種である。模式標本の産地は東京付近となっているようである。Navás は、1913年に、日光の湯本で Gallois 氏が採集した標本をもとに、*R. xanthopus* を記載したが、1918年に Navás 自身が *harmandi* のシノニムとして扱った。それ以外には本種に関する分類的な扱いは全くない。

本種もラクダムシと同様、幼虫は樹皮下に棲み、小昆虫などを捕食していると思われる。

雄交尾器 (第10, 11図)

- ・第9節背板 (9T) は、9節の coxopodite と融合してリング状となっている。
- ・第9節腹板 (9S) は、狭く、リング状構造の腹面前縁部に位置し、リング状構造と背方側面は狭く融合しているが、腹面側は膜で結合している。
- ・9節の coxopodite の後半部は、側面上半部ではリング状構造とは狭い膜質部で分離しているが、腹側面は融合している。後端側面部は後方へ伸長し、大きな突起となっており、後端に向かって徐々



第10—11図. キスジラクダムシ（長野県南安曇郡安房峠産）の雄交尾器. 10, 左側面図.
11, 腹面図. (スケールは1mm)

に細くなり内方へ曲がる。末端は尖る。側面部腹側は外側へ弱く突き出し、先端は尖らず内面は膜質。側面の内部には後方に伸びた突起の筋肉の付着点と思われる ridge がある。

・stylus (s) は、板状でなく棒状、9cxの背側面後端に位置し、9cxと phallus に関節する。基部はやや太く、後端側半分は背方に曲がりカマ形。先端に向かって次第に細くなる。先端は尖り、やや前方を向く。

・ectoproct はキチン化が弱く、板状で多数の毛を持つ。*Inocellia* のものより小さい。

・第10節の腹板はみられない。

・hypovalva (h) は1対で腹面に位置し、腹面正中線に沿って狭い膜質部で分離している正中線付近は背面側へ曲がる。後方 $\frac{1}{2}$ はやや広くなり、後端部側方は小さな突起となる。内側は腹面側（下方）へ向かって曲がり、先端には歯状の小突起を多数装える。hypovalva は、後端が2叉する付近で、phallus とつながり、前方側縁は phallus 及び9cxの内面の膜質部と結合している。小突起と、歯状突起を持つ後端付近は phallus とは離れている。基部から $\frac{1}{3}$ 付近で側面は9cxと癒合している。

・gonarcus はない。

今後の問題点

本報告において、日本産のラクダムシ類2種の雄交尾器形態を簡単に記載したが、筆者のこの群の雄交尾器の形態学的な検討は極めて不十分であり、相同性及び名称は一応 Matsuda (1976) と Aspöck ら (1980) に従ってある。特に、*Inocellia* 属の gonarcus と第10節腹板、phallus 背面部の骨片等の問題は、今後十分に検討すべきであると考えられる。

もう一つはラクダムシ類の分類学的な問題である。長い間日本には一種しかないと思われていたキ

スジラクダムシであるが、筆者が徳島県で採集した *Raphidia* 属の雄は、翅脈相も交尾器形態も、本報告の性格から今回は図を示さなかったものの、今回報告した長野県産の雄とは明らかに異なっている。また、九州の *Raphidia* 属の雄もやはり長野県産のものとは別種と思われ、おそらく日本にはもっと多くの *Raphidia* 属の種が分布していると考えている。しかしながら、もっとも大事な事は、Navás が、東京付近の標本に基づいて記載した *Raphidia harmandi* がはたしてどのような形態をしているかということである。今回筆者が *harmandi* として示した長野県産の雄が本当に *harmandi* かどうかは残念ながらわからない。同時に、日光の標本に基づいて記載され、後に *harmandi* のシノニムとされた *xanthopus* が本当に同一種であるかどうか、という問題も残る。タイプ標本の検討を含めて、改めて調査せねばならない。

一方ラクダムシも海岸付近のマツ林に発生するものとかかなり内陸部に産するもの、本州の山地のものなどがはたして同一種であるかも検討すべきであると考えている。今回はラクダムシは他地域の標本を比較していないのでラクダムシに関しては言及できない。両種とも材料の入手がなかなか困難なことが、現在まであまり注目されずにきた理由かもしれないが、今後、調査個体を増やして全体の再検討をするべきであろう。

参 考 文 献

- 阿部 正喜, 1987. キスジラクダムシ *Raphidia harmandi* Navás の九州からの記録. *Pulex*, (75) : 363.
- 秋田 勝巳, 1986. 奈良県大台ヶ原でキスジラクダムシを採集. 月刊むし, (186) : 41.
- Aspöck, A., Aspöck, C., & H. Hölzel, 1980. Die Neuropteren Europas, Band 1. 495 pp. Goecke & Evers, Krefeld.
- 行徳 直巳, 1986. ラクダムシ *Inocellia japonica* Okamoto の福岡県内陸部からの採集記録. *Pulex*, (74) : 356.
- 平山修二郎, 1933. 原色千種昆虫図譜, 64PP. 104 Pls. 三省堂, 東京.
- 加藤 正世, 1933. 分類原色日本昆虫図鑑 5. 79 PP. 50 pls. 厚生閣, 東京.
- 川瀬 勝枝, 1986a. *Raphidia harmandi* Navás を広島県三段峡で採集. *Pulex*, (72) : 342.
- , 1986b. 日本産ラクダムシ目について. インセクタリアム, 23 (5) : 14-19.
- 木下 周太, 1949. らくだむし幼虫. 内田清之助ほか, 学生版日本昆虫図鑑, p. 429, 第2510図.
- 桑山 覚, 1920. 駱駝蟲に関するナバス氏最近の研究と本邦産同類の昆虫に就いて. 昆虫世界, 24 (279) : 5-9.
- , 1932. らくだむし科. 内田清之助ほか, 日本昆虫図鑑, p. 1552-1553, 第3066-3067図.
- , 1949. らくだむし科. 内田清之助ほか, 学生版日本昆虫図鑑, p. 317, 第1878-1879図.
- , 1950. らくだむし科. 石井 悌ほか, 日本昆虫図鑑 (改訂版), p. 389, 第1060-1061図.
- Kuwayama, S., 1962. A revisional synopsis of the Neuroptera in Japan. *Pacif. Ins.*, 4 : 325-412.
- MacLachlan, R., 1875. A Sketch of our present knowledge of the Neuropterous Fauna of Japan (excluding Odonata and Trichoptera). *Trans. ent. Soc. Lond.*, (1875) : 167-190.
- Matsuda, R., 1976. Morphology and evolution of the insect abdomen. Int. series in pure and applied biology ; v. 56. 534 pp.
- 松村 松年, 1907. 昆虫分類学 上. 336 pp.+9. 警醒社, 東京.
- , 1922. 日本千蟲図解 卷之1. 213 pp. 17pls. 警醒社, 東京.

- 松村 松年, 1931. 日本昆蟲大図鑑. 1479 pp.+29. 刀江書院, 東京.
- , 1933. 日本通俗昆蟲図説. 67 pp.+100 pp. 21図, 春陽堂, 東京.
- * Navás, L., 1909. Raphidides (Insectes, Néuroptères) du Musée de Paris. *Annl's Soc. scient. Brux.*, 33 : 143-146.
- , 1913. Névroptères du Japon recueillis par M. Edme Gallois. *Bull. Mus. Nat. D'Hist. Nat.*, (7) : 441-451.
- 大原 賢二, 1983. キスジラクダムシ *Raphidia harmandi* Navás の九州からの記録. *Pulex*, (69) : 314.
- 岡本半次郎, 1917. 日本産駱駝蟲科に関する研究. 名和靖氏還暦記念寄贈論文集, p. 143-162.
- Petersen, E., 1913. Megaloptera, Fam. Raphididae, 13 pp. 2 pls. In Wytzman, P., *Genera Insectorum*, Fasc. 154.
- Tjeder, B., 1970. 17. Neuroptera. In Tuxen, S. L., (ed.), *Taxonomist's glossary of genitalia in insects* (2nd ed.). p. 89-99.
- * 山下 善平ほか, 1972. 大杉谷および大台ヶ原山の昆虫相および樹上クモ類相. 大杉谷. 大台ヶ原自然科学調査報告書 (三重県自然科学研究会). p. 195-285.
- 山屋 茂人, 1983. 新潟県産ラクダムシ2種の記録. 越佐昆虫同好会々報, (56) : 2.

* 筆者は直接見ていない。

徳島県博物館紀要

第18集

昭和62年3月25日印刷

昭和62年3月31日発行

編集・発行 徳島県博物館
徳島市新町橋2-20

印刷所 原田印刷出版株式会社
徳島市西大工町4丁目5

